

深窓の由乃さん

TomOne

PARALLEL ACT

深窓の由乃さん

絶対に許さない

この場にいる全員——由乃さん以外——は内心そう否定したことだろう。

1

「なっ!? 何よこれはっ!」

リリアンかわら版の最新号を読んで、由乃さんが怒りの声を上げた。

「何? またゴシップでも書かれてた?」

由乃さんがいきなり怒り出すのはいつものことなので冷静だ。

「これよこれ」

紙面をバシバシ叩きながら見せてくる。どうやら今回は山百合会人気投票特集のようだ。

「最下位なのよ、最下位! 私が」

「あゝゝゝ」

それはご愁傷様だ。

「最下位だけでなくまだ許せるのよ」

「この『昔の由乃さま』と『今の由乃さま』で表が分かれてるのは何よ。合わさってたらそこその順位行っただけに。しかも『昔の由乃さま』の方が票が多いのがムカつく!」

(そういうとこだよ由乃さん)

きつと三年生の票なのだろう。ちよつと納得できてる自分がいた。でもそうしたら、『今の由乃さま』へ入れた一・二年生の票が相当少ないことに……いや、きつと姉から『昔の由乃さま』の事を聞いて、そちらに入れた一・二年生が多かったに違いない。「でないと由乃さんがとても可哀想な事に。『昔の由乃さま?』」

「病弱で清楚可憐な美少女だったらしいわよ」

首をかしげた菜々ちゃんに、乃梨子ちゃんが答えてあげた。

「嘘?」

「本当」

信じられなさそうな菜々ちゃんに、祐巳と瞳子が答えた。

志摩子さんは苦笑している。志摩子さんの性格的に、口に出すのがはばかれるのだろう。

「証拠を持ってきますわ」

瞳子が資料室に行き、昔のリリアンかわら版を発掘して持ってきてくれた。

「誰!？」

椅子に座り、淑やかに微笑んでいる由乃さんに、菜々ちゃんとなり梨子ちゃんが驚きの声を上げる。乃梨子ちゃんも直接は知らなかったか。

「趣味、お菓子作り、刺繍……ぶはっ!」

「それ、令ちゃんのと混ざったんだよね」

吹き出した菜々ちゃんに、由乃さんが力なく説明する。

「令さまと入れ替わったのなら納得です」

関係者なら、令さまが少女趣味なのは知っている。

「お菓子作り、ぶふっ! 刺繍……ぶふふっ!」

「失礼な。私だってやろうと思えばやれるわよ」

まだ笑いが止まらない菜々ちゃんに、由乃さんがいらつき

始めた。

「お姉さま、家庭科の成績は?」

「……」

「ですよ」

煽る菜々ちゃんに、由乃さんのこめかみがピクつき始めた。

「まあまあ。でも人気あるみたいだし、一度昔みたいに戻って見たら?」

なだめにかかる。

「戻れって言われても、体力が追いついてなかっただけで中身は変わってないんだから」

「そっかなあ? 結構変わったと思う」

「変わってないって。やってみせようか」

『やってみせる』と言ってる時点で変わってると思うけど、突っ込まないでおいだ。

由乃さんは鞆から時代小説を取り出し、読み出した。

「おお……」

本のタイトルさえ気にしなければ、清楚なお嬢様に見える。

首を僅かに傾け、微笑んでいる様はまさにリリアンの生徒に相応しい。

「あ……」

足を組んだ。本人は無意識な様だ。落胆の溜め息が皆か

ら出る。

「由乃さん由乃さん」

「何？」

「足」

「足？ あ……」

ようやく自覚したようだ。

「一分、持たなかったね……」

「……いいのよ、こんなのは！ 私は私のまま生きるんだか

ら！ それに私が清楚になったら志摩子さんとキヤラ被っち

やうじゃない!!」

「ええ……」

引き合いに出された志摩子さんが困惑するのに気づかず、

由乃さんは残念な宣言をした。